

(様式)

氏 名	谷水 名美
(ふりがな)	(たにみず なみ)
学位の種類	博士(看護学)
学位授与番号	甲 第1号
学位審査年月日	平成29年3月8日
学位授与の要件	学位規程第3条第1項該当
学位論文題名	社会で生活する肝移植レシピエントの Well-Being を目指した看護支援モデル作成 Nursing Support Model That Focuses on the Well-Being of Liver Transplant Recipients in Their Social Lives
論文審査委員	(主) 教授 <u>道重 文子</u> 教授 鈴木 久美 教授 <u>林 優子</u>

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

【緒言】移植看護は移植前から移植後、遠隔期において、継続的かつ長期的な看護の必要性が問われている。肝移植術前後の時期のケアは身体管理中心に行われるが、近年、肝移植を受けたレシピエントは増加傾向にあり、移植後20年以上経過した多くの長期生存者が社会の中で生活をしていることから、移植看護はレシピエントの移植後の暮らしに目を向けることが重要であると言われている。本研究の課題「社会で生活する肝移植を受けたレシピエントの Well-Being を目指した看護支援モデル」は、肝移植後レシピエントの特性や個別性を配慮した、Follow Up の時期における継続的な看護実践を示すモデルである。

【目的】社会で生活する肝移植後レシピエントの困難状況への対応と Well-Being の関係を明らかにし、レシピエントの Well-Being を目指した看護支援モデル(案)を作成する。具体的目標は、1. 肝移植を受けたレシピエントが困難な状況にどのように対応しているのかを明らかにする。2. 肝移植を受けたレシピエントが困難な状況にどのように対応し、それが Well-Being にどのように影響しているのかを明らかにし、看護支援モデル案を作成する。

【方法】研究対象は、目標1・2ともに肝移植を受け、1年以上経過した外来通院中の20歳以上で、研究の参加に同意の得られたレシピエントである。目標1は生体による肝移植を受けた対象者10名に半構成的面接を行い、質的統合法(KJ法)を用いて分析した。目標2は、生体あるいは脳死による肝移植を受けた対象者265名に無記名質問紙調査を行い、因子分析、共分散構造分析、主成分分析、Mann-Whitney U 検定、などを行った。その内容は、個人特性[年齢、性別、就労状況などの13項目]、Well-Being[Well-Beingの測定用具である日本語版FACT-G(Fact-General)；身体面(身体症状)7項目、社会/家族面(社会的・家族との関係)7項目、心理面(精神的状態)6項目、機能面(活動状況)7項目の27項目]、困難状況への対応[困難な状況への対応に関する先行研究の分析結果および肝移植後のレシピエントに関する文献的考察に基づき、独自に作成した32項目]についてである。

【結果および結論】 困難な状況への対応は[退院後の医療サポート], [退院後の情報サポート], [退院後の健康管理], [自らの身体への思い], [ドナーの身体への思い], [退院後の過ごし方], [入院から退院後までの家族・友人への思い]がそれぞれ相互に関係し合う全体構造が明らかになり, 様々な困難によって精神的に揺れ動く状況の中であっても, 自己の身体を守るための適切な行動探しを行いながら, ドナーに配慮し, 支えてくれる家族や友人とともに, 自分らしく前向きに生きていこうとする姿を表していた. 質問紙調査の有効回答数は256名(回収率96.6%)であった. 困難状況への対応を因子分析した結果, 5因子が抽出された(Cronbach's α 係数0.55 - 0.73). 5因子とWell-Beingとの共分散構造分析の結果, 最も適合性が高かった因果モデルは GFI=0.850, AGFI=0.808, RMSEA=0.071, AIC=462.849であった. Well-Beingとの関係で因果係数が高かった因子は, [移植後の脆弱な身体への敏感な反応], [医療者に気軽に相談したい気持ちの抑制], [救われた命を意識した前向きな生き方]であり, -0.39, -0.39, 0.28であった. 困難状況への対応の主成分分析では, 5つの対応パターンが見出された. 年齢, 移植時年齢, 合併症などの群間に差が認められた. 分析結果と先行研究を基に看護支援モデル(案)を作成した.

【キーワード】 肝移植レシピエント, Well-Being, 困難な状況への対応, 共分散構造分析, 看護支援モデル

論文審査結果の要旨

本研究は, 社会で生活する肝移植後レシピエントの困難状況への対応と Well-Being の関係を明らかにし, レシピエントの Well-Being を目指した看護支援モデル(案)を作成することを目的としていた.

副論文では, 肝移植後レシピエントが退院後の困難な状況にどのように対応しながら生活しているのかを肝移植を受けたレシピエント10名に半構成的面接を行い, 質的統合法(KJ法)を用いて分析し, 実態の把握を行っていた.

主論文では, 肝移植後のレシピエントそれぞれが営む生活のなかで困難な状況にどのように対応し, それが Well-Being にどのように影響しているかを明らかにするために, 肝移植後のレシピエント265名を対象に Well-Being の測定尺度である日本語版 FACT-G および副論文の結果より得られた困難な対応に関する項目について質問紙調査を行い, 「困難な状況への対応」の因子構造, Well-Being との因果関係, 肝移植後のレシピエント個人の特性と困難な状況への対応および Well-Being との関係を明らかにしていた. 個人特性と困難状況への対応では, 年齢, 移植時年齢, 合併症等により差が認められ, Well-Being では仕事の有無により差があることを明らかにしていた. 「困難な状況への対応」の主成分分析の結果から「身体志向の慎重行動型」, 「感情調整型」, 「情報活用不足型」, 「いのち志向の生き方探求型」, 「自立した解決志向の非依存型」の5つの対応パターンを見出していた. Well-Being と困難な状況への対応因子の関係については共分散構造分析をもちいて, 「移植後の脆弱な身体への敏感な反応」, 「医療者に気軽に相談したい気持ちの抑制」, 「救われた命を意識した前向きな生き方」の因果係数が高いことを示していた. 以上の結果から, 5つの大項目で構成される看護支援モデル案を考案し, 対応パターンに適した支援内容を提示していた. 支援内容については, 肝移植に関わる看護師に対しての研究を開始しており, 質的量的に着実に研究が行われたことを確認した. 本研究は, 肝移植患者・家族の Well-Being の向上に貢献し, 移植看護の発展に寄与するものである.

以上により, 本論文は本学大学院学則第11条2に定めるところの博士(看護学)の学位を授与するに値するものと認める.